

京都に歴史を刻み、洗練を極めてきた京の銘品の数々。伝統工芸にかくれた物語をご紹介します。



源氏物語の五十四帖を香りで綴る「源氏かおり抄」。四十三帖の「紅梅」は圧縮成型法で作成する。新しい技術で生まれた繊細な形から、伝統的な香りが漂う。

京のお香

くゆらせた上品な香りがほのかに漂う——旅館や料亭、茶席、客を迎える玄関など、京都では日常にお香をたく。寺をはじめ、街の至るところにおいて漂う“香り”は、京都のイメージと重なる。

「お香」とひと口にいても、馴染みのあるお線香、お焼香をはじめ練香・印香、塗香、香木、抹香と種類は多く、シーン、目的、嗜好によって選ばれるお香やたき方は異なる。そして、時代の移ろいととも、人と香りの接し方も変化を遂げてきた。

お香の使い方が日本に伝わったのは飛鳥時代。仏教伝来と同じ頃だといわれている。現代でいうお焼香のような用いられ方が主で、宗教的な要素が強かった。その後、奈良時代には唐より香料を混ぜ合わせる「合香」の製法が伝わり、平安時代になると、貴族の中では香料を複雑に練り合わせた「薫物」がさかんに用いられるようになる。自ら調合したものを炭火でくゆらせ、部屋や衣裳を香らせる「空薫」など各人、各家が独自の香りを楽しむようになっていった。

鎌倉・室町時代を迎えると香木の香りを鑑賞する「聞香」が確立され、江戸時代には茶道、華道と並ぶ芸の道「香道」として発展。財力を持った町人にも香文化が広がり、またお線香の技術が中国から伝わったことで、庶民にも広く浸透していった。

貴重な原料を使い分け、手技と機械が共存

お香の原料は、今も昔も中国やインド、東南アジアなど海外から輸入している。白檀、丁子、桂皮、大茴香、乳香など香辛料や漢方として馴染みのある原料もあるが、天然香料の多くは貴重なものばかり。特に「沈香」は、絶滅危惧種として保全管理が必要とされている香木である。これら天然資源を大切に次代へ守り伝えるため、香老舗 松栄堂では、香木の形状を「ハレ」と「ケ」に応じて使い分ける工夫を提案している。普段使いの「ケ」には不揃いな「爪」や「刻」の形状を、端正に整えられた「角割」の形状はフォーマルな「ハレ」の時に。暮らしのメリハリを賢く楽しむ知恵が生かされている。



職人によって丁寧に割られる香木は、仏事や茶席などで用いられる。



押し出し・盆切りの様子。切り落とした素材はもう一度機械に戻され、ロスをなくしている。



盆板上の線香をすき間なく敷き詰める。素材がやわらかいため、繊細な力加減が求められる。



手軽に楽しめるスティックタイプはお気に入りの香立や香皿と共に楽しめる。



ほのかな香りを楽しむ匂い袋は、火を使わず室温で香るように調合されている。

貴重な原料からお香を成形する際にも工夫がある。一般に手技が丁寧で緻密かのように考えられるが、必ずしもそうではないと語るのは、松栄堂12代目の社長、畑 正高氏。「機械には機械のよさがあり、精度の高い商品が担える。一方で稀少な材料は機械ではロスが多いので、手仕事できっちり使い切る」。創業から300余年、鎖国時代も原料を確保し、家伝の秘法と調合師による独自の配合に基づき香づくりに勤しんできた老舗は、機械と手技をうまく共存させている。

たとえばお線香なら、香料を粉末にして調合した原料につなぎの^{たぶこ} 楠粉^{かくはん}を加え^{ふるい} 篩にかけて均一に混合させると混練機へ。攪拌しながら適量の水と着色料を加え、長年の技と勘で温度、湿度の変化を考慮しながら粘土状に練り上げていく。これを円筒状にプレス成形し、押し出し機から盆板に受け、竹べらで両端を切り落とす。盆板上のやわらかいお線香をすばやく、丁寧に手本板に移し変えて隙間のないように敷き詰め、はみ出し部分を切り落とし、あとはゆっくりと乾

燥させる。

機械一辺倒ではできない、人の技と培ってきた勘は要所で必要とされ、共作でお香を作りあげている。

五感の記憶に残る京文化、日本文化の香り

都が置かれていた京都の地には、早くから香りの文化が王朝貴族の間で育まれてきた。それは連綿と受け継がれ、やがて訪れた人がイメージする「京のにおい」、ひいては「日本文化のにおい」となってきた。このように感じられるのも、老舗が香り文化の発展と継承にたゆまぬ努力をしているからである。

「香をたく」。ここには、おもてなしの心があるのだろう。客人をもてなす香り、仏を迎える香り、自身をもてなす(癒す)香り。おもてなし文化が根付く京都だからこそ、お香は愛され日常となっていく。香りと共によみがえる京都の記憶……香りは名脇役ながら空間そのものをやわらかく包み込む力を持っている。

(取材協力:「香老舗 松栄堂」<http://www.shoyeido.co.jp/>)